
特集 がんと栄養

【巻頭言】

中 屋 豊 (徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部医療栄養科学講座代謝栄養学分野)
寿 満 文 彦 (徳島県医師会生涯教育委員会)

徳島大学ではがんプロフェッショナル養成プランのもと、癌治療の専門家の育成を行っている。特に徳島大学では、このプログラムで全国で唯一の栄養士の養成プランを持っており、がんの栄養管理については、もっとも先端の教育、研究が行われている。

生活習慣とがんの発症には密接な関連が報告されている。特に、喫煙の影響については、多くのがんの発症との関連が示唆されている。また、栄養素についてもがんの発症との関連は昔から多くの報告がある。例えば、わが国においては食生活の変化により、胃がんが減り、大腸がんが増えてきている。種々の栄養素や運動、さらには喫煙との関係などについて多くのエビデンスが蓄積されてきている。ここでは、まず、多くのエビデンスを基に、がんの予防や、がん治療後の食事などをどうするかについて討論を行う。

がん患者では、がんそのものによる、あるいは、がんの治療(手術、放射線、化学療法など)より、栄養障害が高率におこる。栄養不良が生じると、がん患者の生存

率の低下、QOLの低下、治療の中断、さらには治療に対する反応が悪くなるなど多くの好ましくない状態が起こる。がんの化学療法は近年めざましい進歩がみられ、がんの治療、延命に有用な手段となってきた。ここでは、化学療法について、その作用機序および副作用について解説する。特にがん治療中では低栄養が高頻度に見られる。消化器がんは、そのうちでも低栄養が起りやすいがんである。消化器がんを例に、低栄養の発症やその対策について報告する。最後にがん患者の実際の栄養管理について、栄養治療の意義、また具体的な方法についての討論をおこなう。

がんの栄養管理については、医師、薬剤師、看護師、栄養士などの他職種の専門家によるチーム医療により、患者の管理が行われるようになってきている。この分野では進歩がめざましく、高度な知識や技術を持つ各専門家が力を合わせて、がん患者の栄養管理を行うことが重要である。